

愛も情けも ありません



Moriyama Tsuki
森山いつき



あれはひとり旅だった.....	6
何度でもスマホデビュー.....	21
鬼は〜外.....	25
「これでほっとした」.....	28
蛙の子は蛙.....	34
介護認定.....	37
松飾り.....	39
母、救急搬送される.....	43
笑えない話.....	48
通院、付き添い.....	51

認定はおりましたもの……	61
ケアマネさん、やってくる……	64
プチ・スポーツクラブ……	66
そんなに待っていたら……	70
訪問リハを始めてみれば……	74
迎えうつ……	76
「また？」……	78
「お父さんはかわいそう」という神話……	82
脈々と……	134
何かあったら……	144
ポイントカード……	149
ワクチンをめぐるあれこれ……	168
マスク美人……	186

本末転倒……………	188
ランチタイム……………	192
救急車は行く……………	194
ついに♪……………	203
おろおろとして欲しかった……………	205
舞台……………	214
あとがきにかえて……………	248

愛も情けもありません

あれはひとり旅だった

初めてひとり暮らしを始めた時、わたしは五十歳になったばかりだった。

平塚の保健所への異動がきっかけだった。どんなに遠くてもいいから、当時勤めていた職場から脱出させて欲しいと願った結果だったが、実際通い始めてみると、しょっぱなから東海道線は遅延を繰り返して、バスも道路の混雑で遅々として進まない。バス停は事務所の真ん前にあっただが、帰りのバスはいつになつたら来るのか見当がつかなかった。

これはもうたまらない。異動早々、わたしはネットで家探しを始めた。もはや猶予はない。

何軒探したところで、間取りや家賃の条件を変更しなければ同じようなものだ。それは以前、家を出る、出ないで、両親とすったもんだの挙げ句、不動産屋の案内で家探しをして身に染みている。その時の別居の話はうやむやになり自然消滅してしまっただが、今回は必然に恵まれた。

両親にも見てもらおうと、二、三件に絞ったところできさらに一件見つかった。検索条件から『オーロック』をはずしたら、偶然引っかけたのである。

「ここはいい部屋ですよ。確か富士山が見えたような……」。案内してくれた不動産屋さんが言った。引越当日、彼が言った通り西向きの出窓から真正面に、青空を背景にした富士山が見えた時

には仰天した。電車の中から遠く彼方にちよこつとそれらしい姿が影のように見えることがあるが、窓からのそれは雪をかぶり、すそ野まで広がった富士山だった。場所も、職場から自転車で十分ほどだった。

異動にせよ、見つかった家にせよ、偶然によって動かされていくことは多い。

旅先で枕が変わると眠れないというが、引越した当日は一睡もできなかった。

上の階の住人が深夜までテレビゲームに興じ、その爆音に毎晩のように悩まされた。大家さんに訴えたところ、彼は近いうちに引越す予定だという。ひと月ほどの我慢の末、ようやく平穩が訪れた。騒音問題から殺人事件まで起こるといいうが、大げさな話ではないと思つた。もともと天井板が薄いのか、次に越してきた人の足音が、まるで天井を突き破つて降ってくるように感じられたが、以前のゲーム男に比べれば大したことはない。壁の薄さを補うためか、両隣の部屋とは接しない構造になっていたのも幸いだった。玄関脇のエレベーターから、「ポーン」という音がする。誰かが降りたようだ。人の気配はそれぐらいでちょうどよかった。

思い描いていたひとり暮らしのスタイルを実現することに夢中になった。ひとり暮らしのマニユアル本を買う（多くは若い女性向きのものだったが）、ロフトや東急ハンズを徘徊し、冷蔵庫に貼るマグネットや枕元に置く時計、しゃれた小物などを嬉々として買いあさった。

まだ夜も明けきらない時刻、「ポーン」のあとに、タツタツタツというかすかな足音が続き、ほどなく、ベッドの足元から大して離れていない玄関のポストに、自分名義で購読し始めた新聞が差

し込まれる。新聞を読みながらコーヒーメーカーで淹れたコーヒーを飲み、温めたパンを食べる。イメージ通りの朝が始まった。職場が近いため、時間はたつぷりあった。NHKの朝のドラマを見終わると家を出た。当時放送されていた「あまちゃん」のテーマ曲が、わたしの背中を軽やかに押した。今でもあの曲を聞くと、風を切るようにゴールを目指して自転車をこぐ自分の姿が思い浮かぶ。夕方、定時になると、「お先に失礼します」と言って職場をあとにしたその瞬間にはもう、自宅の玄関口に立っていた。休みの日にはパソコン提げて、あっちのカフェ、こっちのカフェをうろついた。知り合いなどひとりもつくらなかった。

賃貸マンションは気が楽だ。備品が故障すれば、大家さんがすぐに業者を手配してくれた。台所(細い廊下にシンクが置いてあるだけだが)の白壁に、干からびたほうれん草がこびりついていようと、レトルト食品を開けたはずみで汁が飛び散ろうと、気にならなかった。

当時を思い出して懐かしく思えるのは、今より若く、体力があったからではない。むしろ体調的には、更年期障害との闘いであつた。あの五年間は、「実家」という帰る家があるのを前提とした、旅行のようなものだったからだ。毎日眺めているとどうということとはなくなつたが、西向きの窓からは富士山も見えた。東海道線が相模川を越える時の風景は、新幹線からのそれに似ていた。部屋の鍵だけは鞆の中に入れたままだつた。いざという時にすぐに持ち出せるようにという、どこか構えたところがあつた。宿泊するホテルの机の引き出しに、小物などを入れておかないのと同じ心境かもしれない。

旅先での出会いは一期一会だ。これはなにも人間相手に限ったことではない。平塚市内や茅ヶ崎、藤沢あたりのデパートで、ピース四百五十円などという、どう考えても三時のおやつにしては高価なケーキを見つけると、何がなんでも買わずにはいられなくなった。旅行中の金銭感覚は日常とは異なる。もう来ないかもしれないと思うと、つい財布の紐がゆるんでしまう。「ひとつですみません」などと口先ばかりで恐縮しながら、たったひとつにしては大きな箱に入れてもらい、無駄使いたような罪悪感を抱きながら、脇目も振らず店をあとにした。

家に帰ると待ちきれないように箱をべりべりと引き破り、ケーキ本体よりもスペースを占めているドライアイスを流しに放り出し、むさぼり食べた。一旦手に入れてしまったらどうでもよくなつた。高いだけあっておいしいことに間違いなかったが（大きさの問題だけでなく）、ショーケース越しに見えていたあのケーキとは何か違う。それなのにとどうか、だからなのか、何度も同じようなことを繰り返してしまふ。〇〇デパートにこんなスイーツがあつてね、と実家への「旅の土産話」として報告しようとしている自分がいた。

旅行中というのは、金銭感覚だけでなくすべてが非現実的になる。自分の年齢、親の老い、疎遠な息子のこと、そうした現実的なことに向き合わないで済んだ。

前提としての帰る家、という存在を考えると、宇都宮での短い結婚生活は、わたしにとって御奉公であったかもしれない。もういくつ寝ればお正月、ではないが、どれだけ辛抱すれば年季が明けて実家に帰ることができるだろうか、というような。

ひとり暮らし始めてからは、ひと月に一度程度、手土産提げて実家に帰省するのが楽しみになった。

両親と同居している時は、お互い口に出せないこだわりやわだかまりがあった。夜、二階の寝室に横たわっていると、階下の両親の部屋からある気配が伝わってきた。床に耳をつけて盗み聞きすると、たいてい、わたしのワルクチ——それは遠く遡って、あれじゃあ、結婚は務まらないわよ、といったようなもの——だった。ひとつしかない台所を使うのにも時間が重ならないように気を使っていた。相手の気持ちや行動を推測し合っていて動いているような気詰まりがあった。遠慮したり我慢したり、そして時たま爆発したり、というのに疲れていた。平日に休暇をとっても居場所がないように思え、いつもの出勤時間よりも遅く家を出てデパートなどで時間をつぶし、早めに帰ってきては出張だったから、などと言い訳をしていた。

それが別居したとたん、一転した。平日の休みには、好きな時間に起き、場合によっては昼間の二時頃に夕食を食べて夜の七時にベッドに潜り込むのも自由。映画に行くのにどこかで時間をつぶさなくても、上映時間に合わせて家を出ることができた。

実家に帰省となると、機嫌のいい顔で何日間かともに過ごした。もてなされ、そしてなんやかや手土産を持たされて（それらは実家で持て余したものが多かったが）、玄関先まで見送られるお客さんになった。荷物の多い時にはタクシーまで呼んでもらって。

滞在中、わたしは小さな子供と同じだった。ねえねえお母さん、なんて言いながら、台所で料理

をする母親のエプロンを追いかけて、なんだかんだと話題を見つけてきまとう子供……。昔は「金魚の糞みたいにくつついてこないで」などと邪険にされたものだが、このたびは久しぶりに帰省したのである。聞いて欲しい話だって母の方にも満載だった。お互いにスキを狙って自分の話題を割り込ませようと試みるのだが、いつのまにか母に軍配が上がる。こんな時は高齢者の方が立場は強い。お迎えが来るまでの時間が短い方に、話す順番を譲ってあげなくてはならないような気がしてしまふのだ。疾病利得ならぬ、「老齡利得」ということになるだろうか。

ドン・キホーテという店がある。それなりに整理されているのかもしれないが、色も形もさまざまな商品が、視界の中にどっと飛び込んでくる。母の、句読点をも吹き飛ばすような話はそれに似ている。整理されていない情報が、こちらに口を差し挟む余地を与えないほど一方的に攻めてくる。しゃべっている最中にも、目に映ったテレビ画面にいきなり反応して、話題が唐突に変わったりする。以前はこんなにおしゃべりではなかった。母の姉や叔母から電話がかかってくると、むしろ母の方が、彼女たちからのとどまることを知らないおしゃべりの聞き手に回っていた。

「年を取るってこんなにタイヘンだと思わなかった。こんなに辛いんだったら、お母さんのこと、もっと手伝ってあげればよかったわ。もう、こればかりは年取ってみるとわからんわね」などと言ったため息などつかれると、それが母自身の悔いにかこつけたわたしへのアドバイス、というか警告のように聞こえてしまい、一瞬身構えることもあった。

横浜駅界隈までランチに繰り出すこともあった。母親とふたりのランチ。これはわたしが長らく

望んでいたことだった。学年の上がる前の春休み、参考書を買うという目的で一緒に伊勢佐木町の有隣堂へ出かけた。お勉強のためという明確な理由がなくても、こんなふうにおしゃべりをしながらランチをしたいと、ずっと望んでいたのだ。デパートの地下にありがちなジューススタンドや、うどんやラーメンで済ますのではなく、レストランで食後のコーヒーを頼むような、母との時間を。結婚が決まり、銀座界隈のデパートに食器の類を一緒に買いに行った時はもちろん、離婚に先立ち、婚家先の部屋を片づけるのに付き添ってもらったあの時さえ、わたしのために時間を割いてくれた貴重なひとときと思えたことがある。

娘の立場を十分に満喫する前に結婚し家を離れ、離婚して戻ってきた時、わたしは母親という立場だった。今回、客人として舞い戻ってくることで、実現したかったささやかな夢らしきものを果たしつつあった。しかも同居の父は耳が遠く、母の話し相手としてはいささか物足りなくなっていた。

「お父さんは、こっちの話を全然聞いてないのよ。ボケの始まりなのかしら」と、母が半分苛立たしげに、半ば不安げに話す。

父は昔から、話半分にしか聞いていなくても、返事だけ調子よく合わせるようなところがあった。それが老いに伴って取り繕いきれなくなっただろう。縦横無尽に展開していく母の話についていくのは、もはや不可能。話の中に出てきた単語をひとつ拾って下手に質問でもしようものなら、それはすでに母の中では説明済みだったのであり、「まああ、さっき言ったじゃないのおお！」とかえっ

て地雷を踏んでしまう。意図的でないにせよ、父は鼓膜の開け閉めをして、ドン・キホーテの商品がむやみになだれ込むことから耳を守っているのだと思えなくもない。

夕刻、流し台の前に並んで、料理の下拵えや食器洗いをしながら母曰く、「ふたりですると、早く済んでいいね」。わたしが息子だったら、当然の顔をして父と一緒にテレビでも見ているのだろうが、娘は女である。客であっても女である。皿洗いは特段苦痛ではなかったが、このセリフはもしや、「帰ってきてね」コールなのか？ という考えが一瞬よぎる。ひとりっ子の娘というのは、息子の役割も負わされているのである。

朝から晩まであれほど言葉が飛び交ったのに、さて、なんの話をしたのか、あとになってもほとんど思い出せなかった。肝心なことはなにひとつ話せず、聞かなかったようなもどかしさが残り、ひと晩徹夜で居間にとどまっていたくなる。こっちの話も聞いて欲しかったという思い。それは執着心とでもいおうか。母はわたしの話を聞くのをどこか恐れているのではないかという疑いが、ちらと浮かぶこともあった。枕が変わるからか寝つきが悪く、むしろ実家が旅先のようになってきた。

お客さんには大してすることもなく、次の日には、不要なものの処分でもしようとする自分の部屋に引きこもるのだが、どうも作業に身がはいらない。落ち着かないのである。こんなことはあとからでもできる。母と話す時間は限られていると思うと、中途半端で切り上げて、やっぱりつきまとってしまふのだった。

平塚に戻る日は朝早くから、使ったシーツや布団カバーを洗い、早く自分の家に戻りたいような、いつまでも実家にとどまっていたいような、ぐずぐずとした気分になった。

母が玄関先まで見送りに出てくる。父もゆっくりした足取りであとから出てくる。

「ここはおまえの家なんやから、いつでも帰ってこい」などと言われると、うれいような、またも圧力をかけられたような気がしてくる。そして、彼らの元気な姿を見るのがもしかしたら今回が最後かもしれないというような悲しみが、どっと襲ってくる。おいとまの時間になって初めて、彼らの老いという現実に向き合う瞬間が、ごまかしようのない時間がやってくるのだ。そうしたもろもろの感傷を振り切るように駅まで早歩きし、電車に乗り降りしているうちに、いくぶん気分が持ち直してくる。平塚駅に着き、「たなばたさま」の発着音を背後に聞いて、いつものスーパーの賑わいに身を置く。普段と変わらない店内にいると、何も失われていないことを確認した思いがする。そこで売られている食材や食料品はお母さんそのものだった。家族連れを見ると、彼らは買い物が終わっても同じ家に帰るのだと思うと実に切なかった。

平塚の誰もいない部屋、そこはわたしが出かけた時の状態のまま、寸分たがわずあるのだが、しばらくは、母の絶え間ない声の余韻がわんわんと充満していた。あとから振り返ると、このけたたましくもある彼女の声を心の底から懐かしみ、もう一度聞きたいと思うのだろうが、しばらくは静かにしていたかった。過剰よりも不足を味わっていたかった。

平塚に異動して四年経った。

旅も長く続けていれば、里心がつくのだろうか。両親の高齢を理由に、わたしは実家からでも通える職場を希望した。

風呂にはいつている父が無事に出てくるか、這いつくばるようにして耳を澄ましている母の姿を見て、実家の近くに待機していた方がいいのではないかと思っただからだ。滑稽な話だが、まだ異動が決まってもいないのに不動産屋に行って、あちらこちらの物件を見せてもらった。四年というのは、希望すればかなり高い確率で異動できる年数なのである。「JTB」や「日本旅行」の窓口に行くと、パンフレットを片手に現地の説明を受けているのと同じ感覚だった。

しかし、いざ、ふたを開けてみたら異動はなかった。同じ職場に五年もいることになったのは初めてだった。

しばらくの間、現実を受け入れることができなかった。食欲が見事になくなった。永遠に平塚市内に閉じ込められたような気がした。引越してきた当初はあれほどきらめいていた平塚の町が、一気に監獄じみた。来年もまたこのままかもしれないと絶望的な気分で、毎日泣けた。わたしは旅先で、帰りの切符をなくして途方にくれていたのだった。

引越すつもりで部屋の隅に積み上げておいた段ボール箱が虚しく邪魔だった。

「え？ 異動、なかったんですかあ」という不動産屋のお兄さんの無邪気な声に、申し訳なさが募る。なんの保証もない引越しのために、一日付き合わせてしまったのだ。平塚駅前の不動産屋の